

広島大学学術情報リポジトリ  
Hiroshima University Institutional Repository

Title	『文選』と浮雲：『文選』李善注の活用の一例として
Author(s)	佐藤, 大志
Citation	中國中世文學研究, 76 : 104 - 128
Issue Date	2023-03-28
DOI	
Self DOI	
URL	<a href="https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00054530">https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00054530</a>
Right	
Relation	



## 『文選』と浮雲 — 『文選』李善注の活用の一例として—

佐藤 大志

### 問題の所在

#### —軌範としての『文選』と李善注の活用

古典文学、ことに中国の古典文学は、文学の因襲のなかでおのずと定められた規範が強く支配するとされる<sup>『1』</sup>。では、彼らが「規範」としたものの、彼らの文学の「核」となるものとは、どのようなものであったのだろうか。そのような中国古典文学の「規範」を探ると同時に、その「規範」と個々の文学事象との距離をはかることによつて、そこに中国の古典文学を問い直し、新たな問題領域を切り拓く可能性も見えてくるのではないだろうか。右は、二〇一八年日本中国学会第七十回大会の次世代シンポジウム「いま、『文選』を読む—中国古典文学の軌範とその距離<sup>『2』</sup>」において提起した問いであった。この問いに応えるべく、その後、科学研究費の交付を得て、四年間の共同研究では『文選』李善注を活用した文学言語の整理と分析を行いつつ、中国古典文学の「規範」としての『文選』と、それぞれの個々の文学事象との距離をはかることを試みてきた。

本稿では、この共同研究における成果を踏まえつつ、『文選』とその李善注から見えてくる「軌範」を探ると同時に、その「軌範」と漢魏晋南北朝及び隋唐の文学との距離をはかることで見えてくることを、「浮雲」という語を例として考えてみたい。

#### 一 中国古典詩における「浮雲」と『文選』

『文選』の「浮雲」について考える前に、まず中国古典文学において「浮雲」がどのようなイメージを有すると理解されてきたかを確認しておきたい。

中国古典詩における「雲」について、前野直彬氏は、『文選』巻四五にも収録される陶淵明「帰去来辞」の「雲無心以出岫、鳥倦飛而知還」を引き、おのれの性に従つて、ゆつくりと立ちのぼり、風のまにまに流れて行く「無心の雲」の姿は、そのまま、陶淵明の心象風景でもあったのだろうと指摘した上で、次のように言う。

無心の雲とは、ごく散文的な言いかたをすれば、人間にとつて無意味な雲である。そして田園に帰った

淵明も、天下国家にとつては、もはや無意味な人間である。無意味と無意味とが触れあって、意味の深い詩情が生じた。そのときの淵明の心には、世間にひろがっている「意味のある」雲に対する、いくばくかの抵抗感が存在していたかもしれない<sup>3)</sup>。

ここで前野氏が言う「意味のある」雲とは、特定の文化や社会によって造られた社会的構築物であり、そのような文化や社会から逃れようとした陶淵明にして、雲は「無心」ととらえられたと言っているのである。

このように「雲」が古代及び中世の中国の詩人にとって「意味のある」雲となる起源をひもといたのは、彼の小川環樹氏の「風と雲―感傷文学の起原<sup>4)</sup>」である。氏がこの論考において、中国の文学をつらぬく感傷主義の起源が、『詩経』ではなく『楚辞』にあることを明らかにされたことは周知のことだが、同論において、氏は漢から六朝の詩歌における「雲」について、特に「浮雲」の用例を多く掲げて、漢魏以来六朝を通じて、行く雲をながめて親しい者の上に思いをはせるといふ言い方が、広く詩人の愛好する表現であったことを指摘する。

また前野氏は「意味のある」雲の例として、「卿雲（慶雲・景雲）」「五色の雲」「瑞雲」「朝雲（巫山の雲雨）」などを列挙し、その中に「浮雲」もとりあげており、孔子が「不義にして富み且つ貴きは、我に於いて浮雲の如し」（論語・述而）と、雲を不安定ではかないものの象徴

としたことで、「浮雲」の通念はその制約を蒙らざるを得なかったこと、そして詩においては、障害としての「浮雲」と遊子の象徴としての「浮雲」があり、六朝以来の詩の世界では後者が多いことを指摘する<sup>5)</sup>。

そして「白雲」とともに「浮雲」の詩語としてのイメージをまとめられた中野将氏は、「浮雲」の用例が『楚辞』に始まることを確認したうえで、後漢・王逸注の「浮雲」解釈は、次の三つであると指摘する<sup>6)</sup>。

- ① 寄る辺なくあちらこちらに流されてゆく存在
- ② 「讒佞」の比喩である「日月」の光を覆う存在
- ③ 「神靈」「天」「神」のような神的存在

しかし『楚辞』以後の韻文については、「希望の実現の障害となるもの」と「寄る辺なくあちらこちらに流されてゆくもの」の二つが代表的なイメージとなり、神的な存在としての「浮雲」は、「白雲」が担うようになると指摘する。

また散文では詩句の典故となる「浮雲」として、先に引用した『論語』述而篇が挙げられること、また『文選』の「浮雲」の用例には高いところにあるということやその形をいうものが見られることも言及されている。

以上の三氏の論考から、「浮雲」は『論語』や『楚辞』を淵源としつつ、不安定ではかないものの象徴としての「浮雲」、神的な存在としての「浮雲」や高いところにある「浮雲」などの意味を与えられてゆくものの、特に漢魏以後の詩においては、障害としての「浮雲」と漂いさ

だまらない「浮雲」の二つが代表的な意味となり、そして六朝以後は、後者の「浮雲」が遊子を象徴とするものとして、また親しい者に思いをはせるよすがとして、詩人に広く用いられることになったとまとめることができそうである<sup>7)</sup>。

では、『文選』のなかの「浮雲」を、李善注を手がかりとして分類した場合、どのような「意味のある」雲として把握できるのだろうか。次節では、先達の指摘に導かれつつ、『文選』の「浮雲」の用例について検討を加え、それが『文選』前後の「浮雲」のなかにどのように位置づけられるのかを考えてみたい。

## II 『文選』の「浮雲」と李善注

『文選』の「浮雲」の用例は十九例、それらを李善注を手がかりとして整理すると次の六つに分類できる。以下に代表的な作品とその李善注及び『文選』の類例を掲げると以下の通りである。

### I 日月を覆うもの 障害となるもの

「古詩十九首」其一「浮雲蔽白日、遊子不顧反」

李善注：浮雲之蔽白日、以喻邪佞之毀忠良。故遊子之行、不顧反也。文字曰、日月欲明、浮雲蓋之。陸賈新語曰、邪臣之蔽賢、猶浮雲之蔽日月。古楊柳行曰、讒邪害公正、浮雲蔽白日。義与此同也。

### 【類例】

司馬相如「長門賦」「浮雲鬱而四塞兮、天竊窺而昼陰」

### II 漂いさだまらないもの

蘇武「詩四首」其四「俯觀江漢流、仰視浮雲翔」

李善注：江・漢流不息、浮雲去靡依。以喻良友各在一方、播遷而無所托。楚辭曰、仰浮雲而永歎。

### 【類例】

李陵「与蘇武三首」其一「仰視浮雲馳、奄忽互相踰」

魏文帝「雜詩二首」其二「西北有浮雲、亭亭如車蓋」

江淹「雜體詩三十首・李陵」「日暮浮雲滋、握手淚如霰」

### III 不安定なはかないもの 浮雲の志

左思「詠史八首」其三「連蠶耀前庭、比之猶浮雲」

李善注：論語、子曰、不義而富且貴、於我如浮雲。

### 【類例】「浮雲」之志

班固「答賓戲」「是以仲尼抗浮雲之志、孟軻養浩然之氣」

潘岳「閑居賦」「於是覽止足之分、庶浮雲之志」

張華「勵志」「安心恬蕩、棲志浮雲」

### IV 高いところにあるもの

曹植「又贈丁儀王粲」「員闕出浮雲、承露槩秦清」

李善注：淮南子曰、魏闕之高、上際青雲。

### 【類例】

「古詩十九首」其五「西北有高樓、上与浮雲齊」

劉鑠「擬明月何皎皎」「落宿半遙城、浮雲讒曾闕」

傅毅「舞賦」「氣若浮雲、志若秋霜」

### V 天・神を象徴するもの

宋玉「九弁五首」其四「塊独守此無沢兮、仰浮雲而永歎」

王逸注：愬天語神、我何咎也。

### 【類例】

班固「東都賦・宝鼎詩」「嶽修貢兮川效珍、吐金景兮獻

浮雲」

鄒陽「上書吳王」「臣聞蛟龍驤首奮翼、則浮雲出流、霧

雨咸集」

## VI 己の心を理解するもの

劉琨「扶風歌」「浮雲為我結、帰鳥為我旋」

李善注：漢書、息夫躬絶命辞曰、秋風為我吟、浮雲

為我陰。

Iの「日月を覆うもの。障害となるもの」は、「古詩十九首」其一（卷二九）がその例として挙げられる。

「古詩十九首」其一

浮雲蔽白日 浮雲 白日を蔽ひ

遊子不顧反 遊子 顧反せず

ここで李善注は、浮雲が白日を覆うことは、邪悪な人物が忠良な人物を害することに喩えると解釈し、その後に『文子』、陸賈『新語』、「古楊柳行」を引用する。『文子』上徳は「浮雲」が障害となることを言うのみだが、陸賈『新語』慎微、「古楊柳行」は、その「浮雲」のあり

さまを讒佞の者が公明正大な賢者を蔽い損なうことに喩える。この「浮雲」が日月を覆うさまを、讒佞な人物が賢者を覆い損なうことに喩える例は、既に『楚辞』に見え、「楚辞」九弁に「何汜濫之浮雲兮、森壅蔽此明月。忠昭昭而願見兮、然露晷而莫達」（何ぞ汜濫せるの浮雲、森として此の明月を壅蔽す。忠昭昭として見るを願へど、然く露晷して達する莫し）とあり、王逸注は、ここは「浮雲」が明月を蔽うことを讒佞の者が忠良仁賢な人物を害することを喩えるとする<sup>20</sup>。

ただ『文選』には、この他に「浮雲」が讒佞の者に喩えると考えられる例は見られない。類例として挙げた司馬相如「長門賦」（卷一六）の「浮雲鬱而四塞兮、天窈窕而昼陰」（浮雲 鬱として四もに塞がり、天窈窕として昼陰し）は、長門宮で悲歎する陳皇后の周囲の状況を描く場面であり、天を蔽う「浮雲」は彼女の晴れない心境や障害となる存在を暗示するものと理解できる。

先の「古詩十九首」其一も、小川氏が既に指摘されるように<sup>21</sup>、「日」よりも「雲」に重点があると考えれば、遠く離れた夫の身に何か障害があることを暗示するものと解釈できるが、李善注の指摘により、日月を覆う「浮雲」を賢者を損なう讒佞な人物の喩えと解釈することは、遅くとも漢代には行われていたようことが分かる。

IIの「漂いさだまらないもの」は、前漢の李陵や蘇武の作とされる古詩がその代表例として挙げられる。

蘇武「詩四首」其四（卷二九）

俯視江漢流 俯して江漢の流るるを觀

仰視浮雲翔 仰ぎて浮雲の翔るるを視る

ここで李善注は、「江漢」の流れてやまず、「浮雲」が寄る辺なく漂いゆくさまを、良き友が離ればなれとなり、流離してよるところが無いことに喩えたとする。更に李善注は「仰視浮雲」という表現の淵源として、『楚辞』宋玉「九弁」の「仰浮雲而永歎」を引く。宋玉「九弁」の引用句については後述するが、「仰視浮雲」の類例は李陵「与蘇武三首」其一（卷二九）にも「仰視浮雲馳、奄忽互相踰」（仰ぎて浮雲の馳するを視るに、奄忽として互いに相い踰ゆ）と見え、漂いさだまらない「浮雲」はこの蘇武・李陵の作とされる詩あたりから見え始めるようである。

次のIII「不安定なはかないもの 浮雲の志」は中野氏が詩句の典故となる散文の例として挙げた『論語』述而篇にもとづくものである<sup>22</sup>。『文選』の用例では、左思「詠史八首」其三がその例として挙げられ、その李善注も『論語』述而篇を引用する。

そしてこの『論語』述而篇の孔子の言葉を踏まえて、富貴を自己と関わりないものとする志を「浮雲之志」としたのが、班固「答賓戲」（卷四五）の「是以仲尼抗浮雲之志、孟軻養浩然之氣（是を以て仲尼 浮雲の志を抗げ、孟軻 浩然の氣を養ふ）である。

類例として挙げた潘岳「閑居賦」（卷一六）の李善注は『論語』述而篇とともに班固「答賓戲」を引き、『論語』から班固「答賓戲」を経て、「浮雲之志」が形成される過程を読みとることができる<sup>23</sup>。

次にIVの「高いところにあるもの」は、中野氏が『文選』に多く用例が見えると指摘するものであり、曹植「又贈丁儀王粲」（卷二四）がその例として挙げられる。

曹植「又贈丁儀王粲」

員闕出浮雲 員闕 浮雲を出で

承露槩泰清 承露 泰清に槩る

ここで李善注は『淮南子』本経訓の記事を引用する。

『淮南子』本経訓

高築城郭、設樹險阻、崇台榭之隆、侈苑囿之大。以窮要妙之望、魏闕之高、上際青雲、大廈曾加、擬於昆侖。（高く城郭を築き、險阻を設け樹て、台榭の隆きを崇くし、苑囿の大なるを修くす。以て要妙の望を窮めんとし、魏闕の高きこと、上は青雲に際り、大廈曾加して、昆侖に擬ふ。）

『淮南子』本経訓は、「魏闕」の高さを表現するのに「浮雲」を用いており、李善注はこれが曹植「又贈丁儀王粲」「員闕出浮雲」という表現の基づくところであることを

指摘する。

『文選』には他に、「古詩十九首」其五（卷二十九）「西北有高樓、上与浮雲齊」（西北に高樓有り、上は浮雲と齊し）、劉鑠「擬古二首・擬明月何皎皎」（卷三十一）「落宿半遙城、浮雲藹曾闕」（落宿 遙城に半ばにして、浮雲曾闕に藹たり）などの例が見られ、何れも高樓や高台の高さを表現する箇所に「浮雲」は用いられている。また傅毅「舞賦」（卷一七）では「氣若浮雲、志若秋霜」（氣は浮雲の若く、志は秋霜の若し）と、志気の高さを表現する例も見える<sup>13)</sup>。

Vの「天・神を象徴するもの」は、宋玉「九弁五首」其四（卷三三）がこれに該当する。

宋玉「九弁五首」其四

塊独守此無沢兮 塊独として此の沢無きを守り

仰浮雲而永歎 浮雲を仰ぎて永歎す

この句は天空高く漂う「浮雲」を仰ぎ見て嘆くことを言い、王逸注は「愬天語神、我何咎也」（天に愬へ神に語る、我何の咎あらん）と言ひ、「浮雲」の向こうにいます天神に己の不遇を訴えると解釈をする。

『文選』にはこの他に類例が二例あり、鄒陽「上書呉王」（卷三九）「臣聞蛟龍驤首奮翼、則浮雲出流、霧雨咸集」（臣聞く蛟龍首を驤げ翼を奮へば、則ち浮雲出流し、霧雨咸く集まる）は、蛟龍が雲や雨を起すさまを描き、

右に引用した『漢書』息夫躬伝は、危険を犯して天子に直言した息夫躬が自らに害が及ぶことを恐れて著した「絶命の辞」の一節であり、彼の悲痛な思いを理解するかのように秋風が吹き、漂い流れゆく「浮雲」がとどまることがを詠む。劉琨の「扶風歌」も、別れの悲歎を理解するかのように漂い流れゆく「浮雲」がとどまることがを詠んでおり、「浮雲」そのものはIIの「漂いさだまらないもの」に属すべき例とも言えるが、それが自分のためにとどまるという発想は、李善注が指摘する『漢書』息夫躬伝に見える「浮雲」の用法に拠るものであろう。

以上のように、『文選』の「浮雲」の用例を、李善注を参考にして分類すると、六つの意味や用法に分けることができそうである。ただ魏晉以前の詩の「浮雲」の用例には、この六つの意味や用法以外の「浮雲」の例も散見する。例えば、魏・徐幹「雜詩五首」其三の「浮雲」などがそうである。

魏・徐幹「雜詩五首」其三（『玉台新詠』卷一）

浮雲何洋洋

浮雲 何ぞ洋洋たる

願因通我辞

願はくは因りて我が辞を通ぜん

飄飄不可寄

飄飄 寄るべからず

徒倚徒相思

徒倚して徒らに相思ふ

班固「東都賦・宝鼎詩」（卷一）「嶽修貢兮川效珍、吐金景兮歎浮雲。」（嶽は貢を修め川は珍を效し、金景を吐きて浮雲を歎す）は、山川から宝鼎や黄金が出るさまを描く。これらは天や神を象徴する例ではないが、神聖な存在との関連や瑞祥としての「雲」であり、「浮雲」の神聖性を示す例と言えるだろう。

VIの「己の心を理解するもの」は、劉琨「扶風歌」（卷二八）の「浮雲為我結、帰鳥為我旋。」（浮雲 我が為に結び、帰鳥 我が為に旋る）の李善注が引用する『漢書』息夫躬伝の例がこれに相当する。

『漢書』息夫躬伝

初、躬待詔、数危言高論、自恐遭害、著絶命辞曰、

「：仰天光兮自列、招上帝兮我察。秋風為我唼、浮雲為我陰。嗟若是兮欲何留、撫神龍兮搯其須、游曠迴兮反亡期、雄失坻兮世我思。」後数年乃死、如其文。

初め、躬 詔を待ちて、数ば危言高論し、自ら害に遭ふを恐れ、絶命辞を著して曰はく、「：天光を仰ぎて自ら列べ、上帝を招きて我察らかにす。秋風 我が為に唼じ、浮雲 我が為に陰る。嗟是のごとくんば何ぞ留まらんと欲す、神龍に撫して其の須を搯り、曠迴に遊びて反りて期を亡ひ、雄は坻を失ひて世我を思はん」と。後数年にして乃ち死し、其の文のごとし。

この詩は遠く異郷にいる夫を思う女性の情を詠んだ詩であり、彼女は「浮雲」に託して相手に思いを伝えようとする。しかし、不安定にひるがえる「浮雲」は「寄」することはできず、女性は空しく相手を思い慕うしかない。

この「浮雲」に思いを託すという発想は、『楚辞』九章・思美人の「願寄言於浮雲兮、遇豊隆而不将。因帰鳥而致辞兮、羌宿高而難当」（言を浮雲に寄するを願ふも、豊隆に遇ひて将られず。帰鳥に因りて辞を致すも、羌 高きに宿りて当たり難し）にあり、徐幹「雜詩五首」其三の「浮雲」はこれを踏まえたものであろう。

また阮瑀「公讌詩」（『初学記』卷一四作阮瑀詩）には「五味風雨集、杯酌若浮雲」（五味 風雨のごとく集まり、杯酌 浮雲のごとし）とあり、ここでは宴席で交わされる酒杯が「浮雲」のようだとする。「如雲」が多いことを形容することは『詩経』に見え、ここの「若浮雲」も酒杯の多さを言うのであろう。

このように漢魏晋詩の「浮雲」の用例は、おおむね『文選』の六つの意味と用法に合致するものの、必ずしも「浮雲」の意味や用法は限定されてはいないようである。それは漢魏晋詩の「浮雲」が、「意味の無い雲」から「意味のある雲」へと、その意味や用法が形成されていく過程にあり、いまだ規範となるべき意味や用法が定まらぬ状態だからであろう。

また『文選』の編纂時期は梁の普通七年（五二六）から中大通二年（五三〇）頃とされており、収録作品は周

から南朝梁代前期までに至るが、『文選』の「浮雲」の用例のうち、南朝の劉宋以後の例は梁・江淹の「恨賦」のみである。そのため、『文選』の「浮雲」は、魏晉以前の「詩」における「浮雲」の傾向を反映して、多様な「浮雲」の意味や用法が混在して見られるのであろう。

では、南朝期の唯一の例である梁・江淹の「恨賦」の「浮雲」はどのように用いられているのだろうか。

#### 江淹「恨賦」(巻一六)

及夫中散下獄、神氣激揚、濁醪夕引、素琴晨張。秋日蕭索、浮雲無光。鬱青霞之奇意、入脩夜之不暘。夫の中散 獄に下り、神氣激揚するに及んで、濁醪 夕に引き、素琴 晨に張る。秋日 蕭索として、浮雲 光無し。青霞の奇意を鬱し、脩夜の暘げざるに入る。

ここは嵇康(「中散」)が下獄されて悲歎にくれる場面であり、夕暮れには濁酒をあおり、朝には琴に思いを託す嵇康の周囲は、もの寂しい秋の日の下、「浮雲」にも光が無いことをいう。哀愁や悲歎を感じさせる景物の中に「浮雲」が用いられていることは『文選』の他の例と共通するが、ここで「浮雲」が「無光」とするのは、本来は「浮雲」が「有光」であること、すなわち輝く光を放つ美しい「浮雲」を前提としているからではなからうか。

この句について李善注はなく、『文選』にも同じような

「浮雲」の例は見当たらない。また管見の及ぶ限り、魏晉以前の詩における「浮雲」にも同様の例は見当たらないようである。ただ梁以後は、江淹の「恨賦」以外にも美しさを感じさせる「浮雲」の例が現れる。

先達の指摘する如く、六朝以後の詩に稿者の調査によれば、特に齊梁以後の詩においては、「浮雲」は遊子を象徴とするものとして、また親しい者に思いをはせるようすがとして広く用いられるのだが、その一方で梁以降の詩には、それとは異なる「浮雲」も現れる。次節では六朝後期の詩における「浮雲」について、『文選』の「浮雲」以後の展開を追ってみたい。

#### 三 六朝後期の詩における「浮雲」

##### — 『文選』の「浮雲」その後

前節に述べたように『文選』の「浮雲」は、西晉以前の詩における「浮雲」の多様な意味や用法を反映しているようであるが、六朝後期には、この「浮雲」の多様性は失われ、漂いさだまらないものとしての「浮雲」が多くを占めるようになる。

その漂いさだまらない「浮雲」の用例は、遊子の象徴として、或いは遠くの人や故郷を思うよすがとして、詩人に悲歎や哀傷を引き起こさせる景物として用いられるようになるのだが、特に齊梁以降の「浮雲」の詩に多く踏まえられているのが、次の魏文帝「雜詩二首」其二(巻二九)である。

#### 魏文帝「雜詩二首」其二

西北有浮雲 西北に浮雲有り  
亭亭如車蓋 亭亭として車蓋の如し  
惜哉時不遇 惜しひかな 時遇はず  
適与飄風会 適たまま飄風と会ふ  
吹我東南行 我を吹きて東南に行かしめ  
南行至呉会 行き行きて呉会に至る  
呉会非我郷 呉会 我が郷に非ず  
安能久留滞 安んぞ能く久しく留滞せん  
棄置勿復陳 棄て置きて復た陳ふる勿かれ  
客子常畏人 客子は常に人を畏る

この詩は、西北の「浮雲」が時に遇わず、風に吹かれて東南の「呉会」に至ることを、故郷を離れて異郷を旅ゆく「客子」たる自分と重ね合わせて、遊子の漂泊の思いを詠んだものである。

齊梁以後の詩には、この魏文帝「雜詩二首」の表現を踏まえつつ、漂泊の身の上に喩えたり、望郷の思いを述べる詩が多く見え始める<sup>13)</sup>。例えば、次のようである。

#### 南齊・謝朓「曲池之水」(『謝宣城詩集』巻二)

浮雲自西北 浮雲 西北よりし  
海江思無窮 海江 思ひ窮まり無し

#### 南齊・謝朓「奉和隨王殿下詩十六首」其九(同巻五)

浮雲西北起 浮雲 西北に起こり  
飛來下高堂 飛來して高堂に下る  
南齊・陸厥「南郡歌」(『樂府詩集』巻七二)  
旅雁向南飛 旅雁 南に向かひて飛び  
浮雲復如蓋 浮雲 復た蓋のごとし  
梁・江淹「學魏文帝詩」(『古詩紀』巻七六)  
西北有浮雲 西北に浮雲有り  
繚繞華陰山 繚繞たり華陰の山

右に挙げた詩は「西北」「如蓋」のように、魏文帝の「雜詩」の表現を踏まえつつ、漂泊の象徴として「浮雲」に自らの姿や愛する人の姿を重ね合わせる。

そして、北周・王褒「和庾司水修潛橋詩」(『初學記』巻七)では、共に北朝に仕える庾信と自らの現在の立場を述べて、「空悅浮雲賦、非復採蓮謳」(空しく悦ぶ浮雲の賦、採蓮の謳を復するに非ず)と言う。牛貴琥注によれば、「浮雲賦」は魏文帝「雜詩」を指し、二句は現在庾信と自分が西北の地長安で詩を唱和しており、江南の水辺で採蓮曲を互いに唱和していた時とは異なってしまうことを言う<sup>14)</sup>と解釈する<sup>15)</sup>。このように魏文帝「雜詩」は「浮雲の賦」と異称されるほど、「浮雲」の詩の代表的作品となっていたと考えられる。

そして、六朝後期の詩における「浮雲」のもうひとつの特徴として指摘すべきは、江淹「恨賦」のような美の対象としての「浮雲」が、梁以後の詩に見られ始めることである。例えば、梁簡文帝「詠雲詩」などがそうである。

梁簡文帝「詠雲詩」(『芸文類聚』卷一)  
浮雲舒五色 浮雲 五色を舒べ  
馬腦映霜天 馬腦 霜天に映ず  
玉葉散秋影 玉葉 秋影に散り  
金風飄紫煙 金風 紫煙を飄す

これは「雲」を詠じた詠物詩であり、五色の「浮雲」が瑪瑙のように秋の空に輝き、玉葉のように秋の日に照らされ、秋風に翻る瑞雲となるさまを詠じる。前野氏は、「意味のある雲」として、黃帝が蚩尤と戦った際に、「金枝玉葉」の形をした五色の雲が、皇帝の頭上にとどまっていたとする西晋・崔豹『古今注』の故事を引く<sup>15</sup>が、江淹「恨賦」の「浮雲」はこの五色の雲を想起させる。ただ「五色」「玉葉」の語は、崔豹『古今注』にも見えるが、「浮雲」との関連でいえば、陸機「浮雲賦」に「五色」「玉葉」「馬腦」の語が見え、梁簡文帝はこの詠物賦を踏まえた可能性もある。

陸機「浮雲賦」(『芸文類聚』卷一)

の表現が見え、梁簡文帝は「浮雲」の美しさを詠むのに、晋宋の詠物賦から着想を得ているようである。

また従来の「浮雲」の意味や用法を活かしつつ、その美しさも盛り込む例もある。例えば、蕭子顯「燕歌行」は、その題名から知れるように、遠く出征する男性を慕う女性の思いを詠むが、その女性が自分の現状を男性に訴えて次のように言う。

蕭子顯「燕歌行」(『玉台新詠』卷九)  
明月金光徒照妾 明月の金光 徒らに妾を照らし  
浮雲玉葉君不知 浮雲の玉葉 君知らず

ここで「浮雲」は漂泊の身である男性と重ね合わせているとも解釈できるが、「金光」「玉葉」という語が用いられているように、「明月」と「浮雲」は男性を思う女性の周囲を美しく飾る装置としても機能している。

このほかにも梁簡文帝「浮雲詩」(『玉台新詠』卷一〇)は巫山の雲雨の故事を踏まえて、重く垂れ込めたり、軽やかにひるがえる「片雲」の姿を愛で、沈滿幹「映水曲」(『樂府詩集』卷七七)は「輕鬢」を「浮雲」に、「双蛾」を「初月」に見立ててその美しさを詠む。

更に陳の後主は、山中の寺院の幽遠なさまや春の穏やかな景色を「浮雲」を用いて描く。

陳後主「同江僕射遊攝山棲霞寺詩」

金柯分、玉葉散。緑翹明、巖英煥。……有若芙蓉群披、薜華総会。車渠繞理、馬腦繆文。  
金柯分かれ、玉葉散れり。緑翹明かに、巖英煥かなり。……芙蓉の群れ披き、薜華の総て会まるが若き有り。車渠 理を繞らし、馬腦 文を繆る。

陸機の「浮雲賦」は、さまざまに移動し変化する「浮雲」の形状や美しさを描いた詠物賦であり、障害や漂泊のイメージが伴う「浮雲」とは異なり、むしろ瑞祥や高貴な存在としての雲を描く。梁簡文帝はこの他にも詠物賦の表現を踏まえた「浮雲」の例がある。

梁簡文帝「鳥棲曲四首」其二(『玉台新詠』卷九)  
浮雲似帳月成鈎 浮雲は帳に似 月は鈎を成す  
那能夜夜南陌頭 那ぞ能く 夜夜南陌の頭  
宜城醞酒今行熟 宜城の醞酒 今行く熟せん  
停鞍繫馬暫棲宿 鞍を停め馬を繫ぎて暫く棲宿せよ

ここでは「浮雲」を「帳」に見立て、「月」と対比させて描くが、これは謝靈運「怨曉月賦」(『芸文類聚』卷一)に「臥洞房兮当何悦、滅華燭兮弄曉月。昨三五兮既滿、今二八兮將缺。浮雲霏兮收泛灑、明舒照兮殊皎潔」(洞房に臥して当に何をか悦ぶべき、華燭を滅して曉月を弄す。昨三五にして既に満ち、今二八にして將に缺けたり。浮雲霏けて泛灑を収め、明舒照りて殊に皎潔たり)と類似

(『広弘明集』卷三〇上)

天迴浮雲細 天迴かにして浮雲細く  
山空明月深 山空しくして明月深し  
陳後主「同平南弟元日思婦詩」(『古詩紀』卷九八)  
浮雲斷更統 浮雲 断へて更に続き  
輕花落復香 輕花 落ちて復た香り

特に後者はそれまで哀愁や悲歎を感じさせる秋の景物として用いられることが多かった「浮雲」を春の景物として用いる点が注目される。

また梁以後の詩における「浮雲」の用例で、更にもう一つ特徴的なことは、「浮雲」を良馬と結びつけて用いる詩が見られることである。梁詩では、次の庾肩吾の詩がそれに当たる。

庾肩吾「侍讌九日詩」(『芸文類聚』卷四)  
飲羽山西射 飲羽 山西の射  
浮雲冀北驄 浮雲 冀北の驄  
塵飛金埒滿 塵飛びて 金埒満ち  
葉破柳條空 葉破れて 柳條空し

この詩は北宋・蒲積中編の『古今歳時雜詠』では「九日侍宴樂遊苑応令詩」と題されており、右の四句は宴中で催される騎射の様子を描いた部分である。「飲羽」は春

秋楚の武將養由基が射た矢が石に刺さったという故事を踏まえ、「浮雲」は「漢郊祀歌十九首」天馬（『漢書』礼楽志二）に「志倏儻、精權奇。箭浮雲<sup>16</sup>、唵上馳」（志は倏儻たり、精は權奇たり。浮雲を箭み、唵として上馳す）を踏まえ、浮雲を踏むように疾走する馬の姿を形容する<sup>17</sup>。

このように疾走する馬の姿に「浮雲」を用いる例は梁

代の詩にはこの一例しか見られないが、陳代の詩や北朝の詩においても、顔之推や庾信など北朝に仕えた南朝の文人にそれぞれ作例が見える。いま幾つか例をあげると、以下のようなものである。

陽縉「俠客控絶影詩」（『芸文類聚』卷三三）

影入吳門疑曳練 影は吳門に入りて練を曳くかと疑ひ

顔之推「聽鳴蟬篇」（『初学記』卷三〇）

劍影奔星落 劍影 奔星の落ち  
馬色浮雲起 馬色 浮雲の起こる

庾信「詠画屏風詩二十五首」其一八

浮雲随走馬 浮雲 走馬に随ひ  
明月逐彎弓 明月 彎弓を逐ふ

ており、それらは馬を形容する「浮雲」や、悲哀だけでなくむしる美しさを感じさせる「浮雲」である。

盧照鄰「結客少年場行」（『盧照鄰集箋注』卷一）

玉劍浮雲騎 玉劍 浮雲の騎  
金鞭明月弓 金鞭 明月の弓

盧照鄰「贈益府裴録事」（同卷一）

浮雲映丹壑 浮雲 丹壑に映え  
明月滿青山 明月 青山に満つ

盧照鄰「明月引」（同卷二）

浮雲卷靄 浮雲 靄を巻き  
明月流光 明月 光を流す

「結客少年場行」は玉劍をたずさえる遊俠者が乗る馬を「浮雲の騎」と言い、「贈益府裴録事」は遠くにいる友を思つて「浮雲」や「明月」を見ている。両者は離別を想起させるものとして用いられているようだが、「丹壑」に映える雲と青山に満ちる月の光は悲しくも美しい景物として描かれている。また「明月引」は「浮雲」が霧散して明月が現れることを言い、「浮雲」そのものは日月を覆う存在ではあるが、引用した冒頭四句は曹植「七哀詩」の「明月照高樓、流光正徘徊」を想起させる、これもまた悲しくも美しい景物である<sup>18</sup>。

陽縉は絶影のような名馬が疾走する姿を、魏文帝「雜詩」を踏まえて西北から来た「浮雲」のようだといい、顔之推は馬の姿を湧き起こる浮雲にたとえ、庾信は疾走する馬が「浮雲」のように、彎曲する弓が「明月」のようだと、馬と弓を「浮雲」と「明月」に重ね合わせる。

このように馬の姿を「浮雲」と表現する例が梁以後に現れ、またそれらは従来の「浮雲」のイメージや美しき「浮雲」のイメージを掛けあわせて表現が生み出されている。先達の指摘する如く、六朝以後の詩においては漂いさだまらない「浮雲」が多数を占めるようになるのだが、その中でも梁以後の詩においては、西晋以前の「浮雲」の意味や用法とは異なる、新たな「浮雲」の意味や用法が形成され始めていることもうかがうことができる。では、初盛唐期の「浮雲」はどこへ向かうのか。次節では初盛唐期の「浮雲」の行方を追ってみたい。

#### 四 初盛唐詩における「浮雲」

——李白の「浮雲」をめぐって

まず初唐の詩における「浮雲」は、六朝末に現れた「浮雲」、すなわち美の対象としての「浮雲」と馬を形容する「浮雲」の例が目立ち、また六朝期には圧倒的に多かった漂いさだまらない「浮雲」の割合も少なくなる。例えば、初唐四傑の一人盧照鄰は「浮雲」の用例が四例あるが、そのうちの三例は「浮雲」と「明月」とを対句とし

この他にも、宋之間「明河篇」（『全唐詩』卷五一）では「已能舒卷任浮雲、不惜光輝讓流月」（已に能く舒卷するは浮雲に任せ、光輝の流月に譲るを惜しまず）と霧散する「浮雲」と輝く「流月」を対として美しき景物が描かれ、蘇味道「單于川對雨二首」其二（『全唐詩』卷六五）では「飛雨欲迎旬、浮雲已送春」（飛雨 旬を迎へんと欲し、浮雲 已に春を送る）と、恵みの雨をもたらす春の「浮雲」が描かれ、そして李嶠「馬」（『全唐詩』卷六〇）では「明月來鞍上、浮雲落蓋中」（明月 鞍上に来たり、浮雲 蓋中に落つ）と、天馬の麗しく優れた姿を描く。このように六朝後期の「浮雲」からの流れをくむ「浮雲」が見える一方、西晋以前の「浮雲」の意味・用法を用いる詩もあり、六朝詩のように漂いさだまらない「浮雲」が多数を占める状況とは異なってくる。

盛唐の詩に至ると、再び漂いさだまらない「浮雲」の例が多くなり、特に李白には有名な「送友人」の「浮雲遊子意、落日故人情」に代表されるように、漂いさだまらない「浮雲」の例が圧倒的に多く用いられている。しかし、その李白においても、次のようなさまざま「浮雲」がその詩には用いられている。

李白「答杜秀才五松山見贈」

（王琦注『李太白全集』卷一九）

浮雲蔽日去不返 浮雲 日を蔽ひて去りて返らず  
總為秋風摧紫蘭 總べて秋風の為に紫蘭を摧かる

李白「峨眉山月歌送蜀僧晏入中京」(同卷八)  
我浮雲滯吳越 我浮雲に似て吳越に滞り  
君逢聖主遊丹闕 君は聖主に逢ひて丹闕に遊ぶ

李白「登太白峰」(同卷一一)  
願乘冷風去 願はくは冷風に乗じて去り  
直出浮雲間 直ちに浮雲の間に出づるを

李白「贈郭季鷹」(同卷九)  
河東郭有道 河東の郭有道  
於世若浮雲 世に於いて浮雲の若し

李白「江夏寄漢陽輔録事」(同卷一四)  
長呼結浮雲 長呼して浮雲を結び  
埋没顧榮扇 埋没す 顧榮の扇

「答杜秀才五松見贈」は楊雄のような文才のある人物が小人の讒言に遭って世を避けて隠棲することを言い、「峨眉山月歌送蜀僧晏入中京」は魏武帝「雜詩」を踏まえて江南の地で放浪する身を「浮雲」に喩え、「登太白峰」では「莊子」に見える「冷風」に乗って天の高みへと上りゆくことを願う。また「贈郭季鷹」では『論語』の孔子の言葉を踏まえて郭太が世間にとつて意味のない存在であることを言い、「江夏寄漢陽輔録事」では、恐らく劉

琨「扶風歌」の「浮雲為我結」を踏まえて、遠く都を離れて報われることなく、長く出征する嘆きを、同じく西晋に仕えた顧榮の扇の故事と対応させて表現したものであるう。

そして次の「秋夕旅懷」では、秋の旅愁を増す景物として「明月」の輝きとともに夕方の「浮雲」の「色」を見つめ、「效古二首」其一では日暮れに宮中を退出するに名馬に乗って帰るさまを描く。

李白「秋夕旅懷」(同卷二四)  
目極浮雲色 目は極む 浮雲の色  
心斷明月暉 心は断ゆ 明月の暉

李白「效古二首」其一(同卷二四)  
歸時落日晚 歸る時 落日の晩  
蹙蹙浮雲驄 蹙蹙たり 浮雲の驄

この李白の「浮雲」のように、初盛唐の詩における「浮雲」は漂いさだまらない「浮雲」の例が多いものの、むしろ『文選』に見いだされた魏晋以前の「浮雲」や梁以後に新たに現れる「浮雲」に連なる多様な「浮雲」が用いられている。

更に李白には他の詩人たちには見られない新しい「浮雲」の用法も見られる。

李白「古風五九首」其三(同卷二)  
揮劍決浮雲 劍を揮ひて 浮雲を決し  
諸侯尺西來 諸侯 尺く西に来たる

李白「送白利從金吾董將軍西征」(同一七)  
劍決浮雲氣 劍は浮雲の氣を決し  
弓彎明月輝 弓は彎く明月の輝

李白「在水軍宴贈幕府諸侍御」(同卷一一)  
浮雲在一決 浮雲 一決に在り  
誓欲清幽燕 誓ひて幽燕を清めんと欲す

これらはいずれも、趙の恵文王に天子の劍について尋ねられた莊子が、その特長として「上決浮雲、下絶地紀」。此劍一用、匡諸侯、天下服矣。此天子之劍也」(上は浮雲を決し、下に地紀を絶つ。此の劍一たび用ふれば、諸侯を匡し、天下服せり。此れ天子の劍なり)と説いたという『莊子』説劍に見える故事に基づくものである<sup>19)</sup>。そして更に、李白の「浮雲」には、陶淵明の「無心の雲」を想起させるような「浮雲」の例もある。

李白「古風五九首」其一二(同卷二)  
松柏本孤直 松柏 本と孤直  
難為桃李顏 桃李の顔を為し難し  
昭昭蔽子陵 昭昭たり 蔽子陵

垂釣滄波間 釣を垂る 滄波の間  
身將客星隱 身は客星と隠れ  
心与浮雲閑 心は浮雲と閑かなり  
長揖万乘君 長揖す 万乗の君  
還歸富春山 富春の山に還歸す  
清風灑六合 清風 六合に灑ぎ  
邈然不可攀 邈然として攀づべからず  
使我長嘆息 我をして長く歎息し  
冥棲巖石間 巖石の間に冥棲せしむ

この詩は後漢の隱者嚴光が光武帝の招聘に応ぜず、富春山で終生過ごしたことを讃えたものである。「客星」は嚴光の足が共に横臥していた光武帝の腹の上に乗った翌日、客星が天子の座を犯すという天文が現れたという故事による。その対句に心が「浮雲」とともに静穩であると言うは、「客星」のような明確な出典という訳ではないが、陶淵明「歸去來辭」の「雲無心以出岫、鳥倦飛而知還。景翳翳以將入、撫孤松而盤桓」(雲は無心にして岫を岫を出で、鳥は飛ぶに倦みて還るを知る。景翳翳として以て將に入り、孤松を撫して盤桓たり)を想起させるであらう。

このような隱者と結びつく「浮雲」は、初唐期以前の詩には見られないが、盛唐の詩には李白以外にも、隱者や田園と結びつく「浮雲」が、儲光羲の詩などにも見られる。

儲光義「雜詠五首・幽人居」(『全唐詩』卷一三六)

幽人下山徑 幽人 山徑を下り  
去去夾青林 去き去きて 青林に夾まる  
滑処莓苔濕 滑処 莓苔湿ひ  
暗中蘿薜深 暗中 蘿薜深し  
春朝煙雨散 春朝 煙雨散じ  
猶帶浮雲陰 猶ほ帶ぶ 浮雲の陰

儲光義「同王十三維偶然作十首」其九

(同卷一三七)

空山暮雨來 空山 暮雨來たり  
衆鳥竟棲息 衆鳥 竟に棲息す  
斯須照夕陽 斯須 夕陽に照らされ  
双双復撫翼 双双 復た翼を撫す  
我念天時好 我は念ふ 天時の好く  
東田有稼穡 東田 稼穡有るを  
浮雲蔽川原 浮雲 川原を蔽ひ  
新流集溝洫 新流 溝洫に集まる  
裴回顧衡宇 裴回して 衡宇を顧みれば  
僮僕邀我食 僮僕 我を食に邀ふ  
臥覽牀頭書 臥して覽る 牀頭の書  
睡看機中織 睡りて看る 機中の織  
想見明膏煎 明膏の煎がるるを想見すれば  
中夜起唧唧 中夜 起きて唧唧たり

所愧在間居 愧づる所は間居に在り

親故不來往 親故 來往せず  
中園時讀書 中園 時に讀書す  
步欄滴余雪 步欄 余雪を滴らせ  
春塘抽新蒲 春塘 新蒲を抽く  
梧桐漸覆井 梧桐 漸く井を覆ひ  
時鳥自相呼 時鳥 自ら相呼ぶ  
悠然念故鄉 悠然 故郷を念へば  
乃在天一隅 乃ち天の一隅に在り  
安得如浮雲 安んぞ得ん 浮雲のごとく  
來往方須臾 來往 方に須臾たるを

この詩は閑居での生活を心地よく思いながらも、遠く故郷を離れて、現在の生活を恥じることを述べており、結びの二句で「浮雲」のように遙か彼方まで一瞬に往來して故郷に帰ることを願う思いを述べる。ここで「浮雲」は漂いさだまらない雲であるものの、それは悲哀の対象とはなっておらず、むしろ遠くまで一瞬にして往來できる存在として描かれている。

また次の「同王十三維偶然作十首」其四では、風に吹かれるままに形を変えて空に漂う「浮雲」の姿に自らを重ね、自然の変化に任せて何の憂慮もない現在の心境を述べる。

儲光義「同王十三維偶然作十首」其四

儲光義は王維、孟浩然と並ぶ田園詩人として評価される盛唐期の詩人であり、開元年間若くして進士となったものの、のちに官を辞し開元末から天宝初まで終南山に隠居して王維や孟浩然と交わる。そして、天宝年間に至って再び官に就いたが、安祿山の乱で賊軍に捕らえられて仕えた罪によって嶺南に貶せられ、そこで生涯を終えたとされる<sup>20)</sup>。

その「雜詠五首」は彼が終南山に隠棲していた時期の作とされる詩であり、「幽人居」は隱者の幽居のありさまを描き、また「同王十三維偶然作」は王維の「偶然作」に唱和した詩で、田園で農事に勤しむ生活の喜びを描いた後に、結びに自らを焦がすような生き方を思つて、その嘆きを詠む。

兩詩の「浮雲」は空を覆い雨をもたらす雲だが、それは従來の障害としての「浮雲」ではなく、前者は春の好ましい景物であり、後者は作物に恵みを与えてくれる存在である。もしこれを「浮雲」の系譜に位置づけるとすれば、梁以後に現れた、美の対象としての「浮雲」の延長線上に位置づけられるであろう。

また儲光義には、これ以外にも空に漂う「浮雲」を自由の象徴として用いるかのような例も見える。

儲光義「間居」(同卷一三八)

薄遊何所愧 薄遊 何ぞ愧づる所あらん

浮雲在虚空 浮雲 虚空に在り

隨風復卷舒 風に隨ひて復た卷舒たり  
我心方処順 我が心 方に順に処り  
動作何憂虞 動作 何をか憂虞せん  
但言嬰世網 但だ言ふ 世網に嬰かりて  
不復得間居 復た間居を得ずと  
迢遞別東國 迢遞 東國に別れ  
超遙來西都 超遙 西都に來たる  
見人乃恭敬 人に見ふは乃ち恭敬  
曾不問賢愚 曾て賢愚を問はず  
雖若不能言 言ふ能はざるがごとしと雖も  
中心亦難誣 中心亦た誣ひ難し  
故鄉滿親戚 故郷 親戚に満ち  
道遠情日疏 道遠くして 情は日に疏し  
偶欲陳此意 偶ま此の意を述べんと欲し  
復無南飛鳧 復た南に飛ぶ鳧無し

いずれも閑居での生活を心地よく思いつつ、望郷の思いに駆り立てられる思いを詠むが、「浮雲」そのものは詩人の悲哀や感傷を引き起こすものではなく、「同王十三維偶然作十首」其四に至っては、「浮雲」は「順に処る」我が心を象徴するような存在としてある。

この他にも、岑参「太白胡僧歌」(『岑参集校注』卷五)に「此僧年紀那得知、手種青松今十圍。心將流水同清淨、

身与浮雲無是非」(此の僧 年紀那ぞ知るを得ん、手づから青松を種ふるは今十圍なり。心は流水と清浄を同じくし、身は浮雲と是非無し)とあり、胡僧の清らかな心を「流水」に、拘りのない姿を「浮雲」にたとえる。

この「身与浮雲無是非」の句について、劉開揚箋注『岑參詩集編年箋注』(巴蜀書社 一九九五)は『論語』述而の「於我如浮雲」と陶淵明「歸去來辭」の「無心の雲」を引く。『論語』の「浮雲」を踏まえて世事とは関わらない思いを「浮雲」に喩えることは、王維「酌酒与裴迪」(『王右丞集箋注』卷一〇)にも「世事浮雲何足問、不高臥且加餐」(世事は浮雲にして何ぞ問ふに足らん、高臥して且つ餐を加ふるに如かず)とあり、『論語』では「不義」にして「富貴」であることを「浮雲」に喩えて、それが自分にとつてははかなく意味の無いものだ孔子は述べていたのに対して、王維は「世事」を「浮雲」とみなし、それを問うに足らないものとして、自適の生活の価値を強調する。

岑參の「浮雲」が、『論語』の孔子の言葉を踏まえたものか、陶淵明「歸去來辭」の「無心の雲」を踏まえたものかは分からないが、盛唐詩には「浮雲」を隱遁と結びつけ、心の静穏や自適の境地を象徴する存在として用いるようになっていたようである。

以上のように、初盛唐の詩の「浮雲」は、六朝期の「浮雲」が漂いさだまらないものとしての「浮雲」が多くを占めていたのとは異なり、多様な「浮雲」が再び詩に用

いられるようになる。そして、そのなかには、『莊子』説劍の「天子の劍」のような新たな出典を用いた「浮雲」や陶淵明の「無心の雲」を想起させる、心の静穏や自由を象徴する「浮雲」も見出される<sup>21)</sup>。

そして、盛唐の詩における「浮雲」のなかで、もうひとつ新しい特徴として指摘すべきは、仏典を出典とする「浮雲」の登場である。

## 五 「浮雲」と仏典―杜甫の「浮雲」をめぐる

唐代の「浮雲」の出典として従来より指摘されるものに、『維摩經』方便品の「是身如浮雲、須臾変滅」(是の身 浮雲の如く、須臾にして変滅す)がある。これは小川環樹氏が前掲論文において注記するところであり、杜甫の次の詩の出典として『杜詩詳注』に引かれるものである。

### 杜甫「可歎」(『杜詩詳注』卷二一)

天上浮雲似白衣 天上の浮雲 白衣に似たり

斯須改変如蒼狗 斯須にして改変し蒼狗の如し

古往今来共一時 古往今来 一時を共にし

人生万事無不有 人生万事 有らざる無し

小川氏は、杜甫が仏典の故事や成句をそのまま用いる例は稀だが、ここは注家の言う通りであり、「浮雲を人生無常の觀念にむすびつけることは、たぶん仏教伝来以後

ではないかと想われる<sup>22)</sup>と指摘する。

前節でも述べたように、「浮雲」を不安定ではかないものとするのは『論語』より見えるが、『論語』を踏まえた「浮雲」は、富貴や世事が自らと関わりがないこと、すなわち「浮雲の志」を述べるために用いられていることが通例であった。しかし、杜甫の「浮雲」は「白衣」のような雲が「蒼狗」のように変化するさまに着目し、それを人生の有為転変と結びつけるところが、従来の「浮雲」とは異なるところである。

ただ杜甫「可歎」の「浮雲」は、出典とされる『維摩經』方便品の「浮雲」とも距離があるようである。『維摩經』方便品は維摩の人となりを語る章であり、「是身如浮雲、須臾変滅」の句は、病身を装う維摩を見舞う人々に対して、維摩が多病ではない肉体を「是身如○○」の形式を連ねて「泡」「陽炎」「夢」「影」「電光」などに喩えてゆく部分にあり、「浮雲」もその一例として用いられている<sup>23)</sup>。これに対して、杜甫「可歎」は「浮雲」の変化するさまを人生の変化と結びつけており、肉体のはかなさを説く維摩の故事とは異なる。

杜甫には他にも、変化する「浮雲」の性質に着目した詩があり、「登樓」(同卷一三)では「錦江春色来天地、玉壘浮雲变古今」(錦江の春色 天地に来たり、玉壘の浮雲 古今変ず)と玉壘山の上に漂う「浮雲」が古より今に至るまで変化し続けてきたことを、「李潮八分小篆歌」(同卷一八)では「蒼頡鳥跡既茫昧、字体变化如浮雲」

(蒼頡の鳥跡 既に茫昧、字体の変化 浮雲の如し)と、李潮の書の字体が「浮雲」のように変化することを言う。

また杜甫以外では、岑參「梁園歌送河南王説判官」(『岑參集校注』卷二)に「万事翻覆如浮雲、昔人空在今人口」(万事翻覆すること浮雲の如く、昔人 空しく今人の口に在り)と、すべての物事が変わり易いことは「浮雲」のようであり、過去の人は既に世に存在せず、ただ現在の人に語られるだけだと言う。

これは先の王維「酌酒与裴迪」(既出)と同じように、世事をはかないものとして、それを「浮雲」に喩えるものと同じ発想であり、杜甫「可歎」の「浮雲」も、岑參や王維と同じように、世事のはかなさを「浮雲」に喩える例の延長線にあると考えられるのではないか。

また杜甫には『維摩經』方便品の言葉をそのまま用いた例もあるが、それも維摩の故事とはやはり距離がある。

### 杜甫「別賛上人」(同卷八)

百川日東流 百川 日に東に流る

客去亦不息 客去りて 亦た息はず

我生苦飄蕩 我が生 飄蕩に苦しみ

何時有終極 何れの時か 終極有らん

賛公积門老 賛公は积門の老

放逐来上国 放逐せられて上国より来たる

還為世塵嬰 還た世塵に嬰かるが為に

頗帶憔悴色 頗る憔悴の色を帯ぶ

楊枝晨在手 楊枝は晨に手にあり  
豆子雨已熟 豆子は雨に已に熟す  
是身如浮雲 是の身は浮雲の如し  
安可限南北 安くんぞ南北を限るべけん  
異異逢旧友 異を異にして 旧友に逢ひ  
初欣写胸臆 初め胸臆を写すを欣ぶ  
…

この詩は杜甫が秦州滞在時に交流した賛上人との別れに際して作られた詩であり、右に掲げた前半部分は漂泊に苦しむ杜甫が、長安を放逐された賛上人と出会ったことを述べる。吉川幸次郎氏は「是身如浮雲」の句を「これは、出家なるゆえにもつ自由を、「維摩経」の成語をそのまま詩に入れて、たたえる」と、「是身」を賛上人のこととし、「浮雲」を自由の象徴と解するようである<sup>[24]</sup>。南北に限られることなく往来する「浮雲」は、各地を放浪する不安定な漂泊の身とも、拘束されることのない自由の象徴とも解釈可能だが、いずれにしてもそれは『維摩経』の維摩の故事とは異なり、むしろ漂いさだまらない「浮雲」の延長線上にあるものと考えられる。  
李白にも「对雪奉饒任城六父秩满帰京」（王琦注『李太白全集』卷一六）に「独用天地心、浮雲乃吾身」（独り天地の心を用ふれば、浮雲乃ち吾が身なり）とあり、何物にも使役されず、束縛されることもなく、天地のような大きな心を用いれば、我が身は浮雲のように自由である

『維摩経』方便品の故事を踏まえており、その上で我が身に灸を据えることを「浮雲」に灸すると表現している。同じように自注に『維摩経』方便品の言葉が引かれる「老病幽独偶吟所懷」（同卷六八）にも、衰えゆく自らの肉体について述べた後に、「已將心出浮雲外、猶寄形於逆旅中」（已に心を將つて浮雲の外に出で、猶ほ形を逆旅の中に寄す）と、心が老衰する肉体から解放されていることを、「浮雲」の外に出ると表現する。

この白居易の「浮雲」は、明らかに『維摩経』方便品の故事を踏まえており、仏典が新たな「浮雲」の典故となつていことは間違いない<sup>[25]</sup>。それに比べれば、杜甫の「浮雲」は、『維摩経』方便品の言葉を詩句に取りこんではいるものの、その仏典が新たな「浮雲」の典故となつていわけではないことも知れるであろう。

盛唐詩の「浮雲」には、李白の『莊子』に見える「天子の劍」の故事を典故とする新たな「浮雲」の用法も見られるものの、『維摩経』の維摩の故事を典故とする、はかない肉体を象徴する「浮雲」については、盛唐の杜甫などの詩においてはまだ表現を借用するのみであり、白居易において維摩の故事を踏まえた新たな「浮雲」の用法が用いられるようになったようである。

## 六 結び—『文選』李善注の活用について

「浮雲」という語は、雲の代名詞としても用いられるため、「白雲」や「慶雲」「朝雲（巫山の雲雨）」などに

ことを言う例が見える<sup>[26]</sup>。この「浮雲乃吾身」の句について、王琦注は『維摩経』方便品を引くが、「浮雲」を自分の身と重ねることは『維摩経』の言葉に類するとしても、「浮雲」が意味するところは、むしろ前節で述べた世俗を離れた自適の境地を象徴する「浮雲」に近いであろう。

杜甫の「可歎」や「別賛上人」についても、杜甫は『維摩経』方便品の言葉は踏まえているものの、そこで用いられる「浮雲」は、仏典由来の語ではなく、唐以前の「浮雲」の意味や用法の延長線上に派生した新たな「浮雲」の一つであろう。

そして、この『維摩経』方便品の「浮雲」を踏まえ、老病の身を「浮雲」と表現したのが白居易である。

白居易「病中詩十五首・罷灸」

（那波本『白氏文集』卷六八）

病身仏説將何喻

病身 仏説 將た何にか喩ふる

変滅須臾豈不聞

変滅 須臾 豈に聞かざらん

莫遣浄名知我笑

浄名をして我を知りて笑はしむ

休將火艾灸浮雲

莫けん

火艾を將て浮雲に灸するを休む

この詩は自注に『維摩経』方便品の言葉が引かれており、また詩の内容も仏教では病身を何に喩えるかと問ひ、「変滅」「須臾」と説くと言うという出だしで、明らかに

比べると、一定の意味や用法に拘束されたり、特定の故事と強く結びついたりすることが比較的少なく、さまざまの意味や用法が入り交じる可能性がより高い語であると考えられる。魏晋以前の「浮雲」に多様な意味が混在し、混沌とした状態に見えるのは、そのような「浮雲」という語の性質によるからであろうし、また初盛唐期において、多様な「浮雲」が再び詩に用いられるようになったときに、「浮雲」の行方を見定めがたくなるところにも、それは現れている。

本稿では、そのような不安定な「浮雲」という語を、『文選』とその李善注を手がかりとして、いくつかの意味や用法に分類し、その変遷と展開を辿ることを試みた。富永一登氏は、「李善は、「作者必ず祖述する所有る」という執念にも似た典據へのこだわりを見せている<sup>[27]</sup>」と指摘されるが、「浮雲」においても、李善注を手がかりとすることで、個々の作品や作者の用いる「浮雲」の表現や発想の淵源を見定めることが可能である。

また初盛唐期の詩における「浮雲」は、『論語』や魏文帝「雜詩」の表現を明らかに踏まえる例もあるものの、そのように明確に前代の作品を踏まえるよりも、むしろ「浮雲」のもつ意味や用法を、イメージとして想起しつつ詩句を作る傾向が強いようである。そのことは、杜甫の「浮雲」が『維摩経』の言葉をそのまま用いながらも、その意味は『維摩経』の文脈から離れ、杜甫前後の「浮雲」のそれを用いているところにも現れていよう。そう

いう意味では、初盛唐詩の「浮雲」の場合は、特定の書記テキストにもとづくというよりは、当時の詩人たちの抱く「浮雲」のイメージによって用いられることが多いとするほうが妥当なようである。

アストリッド・エアルは、モーリス・アルバックスの集合的記憶について解説するなかで、集団の記憶と個人の記憶との関係について、次のように述べる<sup>[28]</sup>。

私たちは自らが属する集団に左右されながら知覚し、社会に影響を受けながら想起を行っている。認識および想起は何かを意味づけ、世界へと向かうための形式であるが、そのいずれも集合的記憶がなければ成り立ちえない。もともと、集合的記憶によって、個々の人間の記憶から解離した超個人的な拠り所のようなものが想定されるわけではない。集合的記憶と個人的な記憶とは、むしろ相互依存的な関係のうちにある。そして、「個人は集団の立場に身を置くことによって想起するのである」(ibid., S. 23)。集合的記憶は個人による想起行為を通して観察可能になる。なぜなら、「あらゆる個人の記憶は、集合的記憶の展望地点であるからだ」(Halbwachs, 1991, S. 31)。

この集合的記憶と個人による想起行為との関係は、文学の因襲のなかで規範が強く支配する中国の古典文学の作品については、より顕著に言えることであろう。そし

く、今後も『文選』李善注を活用した文学言語の整理と分析を継続して行い、『文選』とその李善注を「規準」とすることの有効性について検証していく必要がある。本稿は『文選』李善注の活用の一例として、その可能性の一端を示し、諸賢のご批正を仰ぐ次第である。

## 注

[1]川合康三「規範と表現―『文選』詩の初めの部立てを中心に―」『東方學』第一三二号(二〇一六)。

[2]シンポジウムの概要については、日本中国学会HP所載二〇一九年度『研究集録』「いま『文選』を読む―中国古典文学の規範とその距離」[http://nippon-chugoku-gakkai.org/wp-content/uploads/2019/09/001\\_001\\_monzen.pdf](http://nippon-chugoku-gakkai.org/wp-content/uploads/2019/09/001_001_monzen.pdf)を参照。

[3]前野直彬「風月無尽―中国の古典と自然―」(東京大学出版会一九七二)「雲」一五頁。

[4]『小川環樹著作集』巻一(筑摩書房一九九七)／初出は「東光」第二号一九四七。

[5]前野氏前掲書二五―三二頁。

[6]後藤秋正・松本肇編『詩語のイメージ―唐詩を読むために』(東方書店二〇〇〇)中野将「浮雲・白雲」。

[7]中国においては、楮自剛「论古典诗歌中『浮云』意象的多重蕴涵」(『开封教育学院学报』第二五卷第一期二〇〇五)に、「浮雲」の詩的イメージは古詩十九首で基本的な定型が確立して以後、次のような四種の典型的な文脈で六層の象徴的な意味をもつようになるという。①「浮雲」が日を覆う情

で、そのような集合的な記憶と個人による想起行為との関係を観察する上で、「作者必ず祖述する所有」という李善の注釈態度は「集合的な記憶の展望地点」として、貴重な「規準(ものさし)」となりうるであろう<sup>[29]</sup>。

本稿では、そのことを「浮雲」という語を例として考えてきた。結果として、『文選』以前の「浮雲」の意味や用法の多様さとその淵源を理解するだけでなく、『文選』の「浮雲」を「規準」として、『文選』以後の「浮雲」の変遷を辿ることで、六朝後期の詩における新たな展開やそれを承けて盛唐期に更に新たな意味や用法が形成されてゆく過程の一端を記述することはできたであろう。

ただし本稿では「浮雲」の意味や用法の変遷と展開を辿ることに終始してしまい、作者や作品又は各時代の個別の問題に踏み込んで、その変遷と展開の意味するところやそれぞれが所属する集団や社会と個々の作品との関連について考察するには至らなかった。

また『文選』とその李善注を「規準」とすることは、その「規準」から外れる事例や現象については構造的に見落としてしまうという問題点もある。特に「浮雲」の変遷や展開について言えば、「浮雲」という語だけを追っているのは、さまざまなイメージが交錯する「雲」をとらえることはできず、その多様で複雑な様相を単純化または中心化してしまう危険性もあり、「雲」を含む他の語についても対象を広げる必要がある。

以上のように、本稿はいまだ課題とすべきところが多

景が「士不遇」と「閨怨」の主題を暗示する。②「西北有浮雲」或いは「楼高人浮雲」という情景が「佳人難遇知音」或いは「高士不遇明主」の主題を暗示する。③「浮雲」と遊子が結びつく情景が、遊子が故郷や友を思う主題を象徴する。

④「浮雲」が名声や富がはかないものであることを暗示する。また晁凤栖「简析中国古代诗歌中的『浮云』意象」(『湖北科技学院学报』第三八卷第三期二〇一八)は、「浮雲」のイメージは『楚辞』から形成されはじめ、漢魏晋南北朝期にそのイメージが作り上げられたことを指摘した上で、(一)名声や財産に無関心な精神の象徴、(二)善きもの抑圧する邪悪な力の象徴、(三)漂泊定めない羈旅の思いの象徴(1遊子が自らを喩え、漂泊の身を嘆くもの、2友人との別れ、別離の情を表現するもの)、(四)悠悠自適な隠者の態度の象徴。の四つの象徴的意味があると指摘する。なお(四)の隠者を象徴する「浮雲」は陶淵明に由来し、唐代の中期から後期にかけてその象徴的意味が成立したことを、氏は劉長卿らの詩を例として掲げて指摘しているが、この隠者を象徴する「浮雲」については後述する。

[8]王逸注に「浮雲晦翳、興讒佞也。妨遮忠良、害仁賢也。夫浮雲行、則蔽月之光。讒佞進則忠良壅也」(浮雲晦翳するは、讒佞を興ふるなり。忠良を妨遮げ、仁賢を害するなり。夫れ浮雲の行けば、則ち月の光を蔽ふ。讒佞進めば則ち忠良壅がるるなり)とある。

[9]小川氏前掲論文。

[10]『論語』述而篇「子曰、飯疏食飲水、曲肱而枕之。樂亦在

其中矣。不義而富且貴、於我如浮雲。」(子曰はく、疏食<sup>そし</sup>を飯らひ水を飲み、脰を曲げて之を枕とす。楽しみ亦た其の中に在り。不義にして富み且つ貴きは、我に於いて浮雲のごとし。)

[11]富永一登氏『文選李善注の活用―文学言語の創作と継承』(研文出版二〇一七)に、班固「答賓戲」の該当句は『論語』述而篇の孔子の言葉と『孔叢子』抗志篇「志を抗ぐれば則ち道に愧ぢず」の「抗志」とを組合せた表現であり、李善注にその両書が引かれているのは、その言語表現の継承を示すものであると指摘がある(同書二頁参照)。

[12]志意の高さを浮雲によつて表現する例は、『楚辞』九歎・惜賢に「冠浮雲之峨峨」とあり、王逸注に「峨峨高貌也。言己独懷持香草、執忠貞之行。志意高厲、冠切浮雲、不得而施用也」(峨峨は高き貌なり。言ふところは己独り懷ひて香草を持ち、忠貞の行を執る。志意高厲にして、冠は浮雲に切するも、得て施用されざるなり)とある。

[13]鍾嶸『詩品』中品に「魏文帝詩、其源出於李陵。頗有仲宣之体則。新奇百許篇、率皆鄙直如偶語。惟「西北有浮雲」十余首、殊美瞻可翫、始見其工矣。不然何以銓衡群彦、對揚厥弟者耶」(魏文帝詩、其の源は李陵に出づ。頗る仲宣の体則有り。新奇なる百許の篇は、率ね皆鄙直にして偶語の如し。惟だ「西北に浮雲有り」の十余首は、殊に美瞻にして翫ぶべく、始めて其の工を見はず。然らずんば何を以つて群彦を銓衡し、厥の弟に對揚する者ならんや)とあり、「雜詩二首」其二を魏文帝の詩の中でも特に高く評価する。

[14]牛貴琥校注『王褒集校注』(中華書局二〇二二)に「空悅

(東に向ひて拝し、北道長驅す。蜺旄羽騎の殷、戈は落日に翻る。突鬢蒙輪の勇、劍は浮雲を決す)とあり、散文には李白以前にも用いられていた例が見える。

[20]芳村弘道『儲光義の田園詩について』『學林』第四号 一八四 参照。

[21]李白は他に「古風五九首」其五三に「戦国何紛紛、兵戈乱浮雲」(戦国 何ぞ紛紛たる、兵戈 浮雲を乱す)とあり、戦乱を象徴する「浮雲」も見える。

[22]小川氏前掲論文の注(一)を参照。

[23]鳩摩羅什訳『維摩詰所説経』方便品(大正蔵)卷一四)に「是身如泡不得久立、是身如炎從渴愛生、是身如芭蕉中無有堅、是身如幻從顛倒起、是身如夢為虚妄見、是身如影從業縁現、是身如響属諸因縁、是身如浮雲須臾变滅、是身如電念念不住」とある。なお鳩摩羅什訳の「是身如浮雲、須臾变滅」を、支謙訳『仏説維摩詰経』(同卷一四)「是身如霧、意無靜相」と訳し、玄奘訳『説無垢称経』(同卷一四)は「是身如雲、須臾变滅」と訳す。

[24]吉川幸次郎著・興膳宏編『杜甫詩注』第八冊(岩波書店二〇一四)一五四頁。

[25]この二句の次には「雖將簪組狎、若与煙霞親」(簪組を將て狎ると雖も、煙霞と親しむが若し)と、官僚たちと交わつてもそれは煙霞に親しむようだとあり、『論語』の不安定ではない「浮雲」との関連も指摘できる。

[26]白居易には、「題玉泉寺」(那波本『白氏文集』卷六)に「湛湛玉泉色、悠悠浮雲身。閑心對定水、清淨兩無塵」(湛湛た

両句、意在暗寓思南之情。浮雲賦、指在西北方写詩。魏文帝「雜詩二首」之二「西北有浮雲、亭亭如車蓋。……」梁簡文帝「詠中婦織流黄詩」(浮雲西北起、孔雀東南飛。)是以「浮雲」意指西北。……此二句詩意謂、現在徒自喜歡你我在西北方異郷長安写唱和詩、但這是在渭水辺、并非江南水辺互相唱和採蓮曲之時了。」とある

[15]前野氏前掲書。『古今注』卷上・輿服に「華蓋、黄帝所作也。与蚩尤戰於涿鹿之野、常有五色雲氣、金枝玉葉。止於帝上、有花葩之象。故因而作華蓋也」(華蓋、黄帝の作りし所なり。蚩尤と涿鹿の野に戦ひ、常に五色の雲氣の、金枝玉葉なる有り。帝の上に止まり、花葩の象有り。故に因りて華蓋を作るなり)とある。

[16]蘇林の注に「籥音躡。言天馬上躡浮雲也」(籥音は躡。天馬上りて浮雲を躡むを言ふなり)とある。

[17]『西京雜記』卷二には、文帝が代国から連れてきた九匹の良馬の中に「浮雲」という名の馬が見える。『西京雜記』卷二「文帝自代還有良馬九匹。皆天下之駿馬也。一名浮雲。……」。

[18]盧照鄰のもう一例の「綿州官池贈別同賦灣字」(盧照鄰集箋注)卷三)には「野徑浮雲斷、荒池春草斑」(野徑 浮雲断たれ、荒池 春草斑なり)とあり、これは別離の悲哀を感じさせる「浮雲」である。

[19]李白以前の詩の用例には「莊子」説劍に由来する「浮雲」は見当たらないようだが、陳子昂「送著作佐郎崔融等從梁王東征序」(徐鵬校点『陳子昂集』卷二)に「東向而拜、北道長驅。蜺旄羽騎之殷、戈翻落日。突鬢蒙輪之勇、劍決浮雲」

り 玉泉の色、悠悠たり 浮雲の身。閑心 定水に對す、清淨 兩つながら塵無し)と、静穩な心の状態になる我が身を「浮雲」に喩える例もある。

[27]富永氏前掲書一二頁。

[28]山名淳訳『集会的記憶と想起文化―メモリー・スタディズ入門』第二章第一節「モーリス・アルバックス―集会的記憶」(水声社二〇二二)三八頁。

[29]本稿の冒頭では「規範」という語を用いたが、『文選』の規範化は李善が注を施した後、唐代中期から後期以降のことと考えられる。それ以前の文学において、『文選』と李善注は「規範」よりも「規準(ものさし)」「または「型(モデル)」と考えたほうが良いと考え、ここでは「規準」という語を用いる。

【附記】本稿は、日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究(B)『「文選」の規範化に関する基礎的研究』(研究課題番号：19501237)の研究結果の一部である。